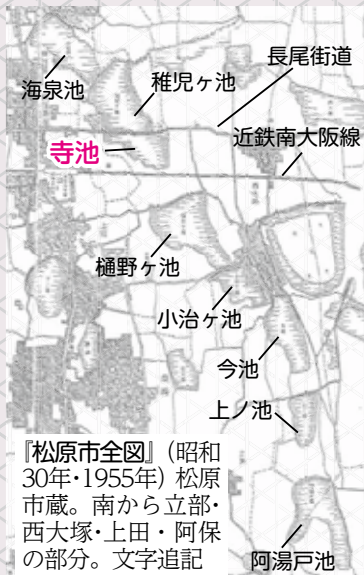


大正・令和の寺池の埋め立て

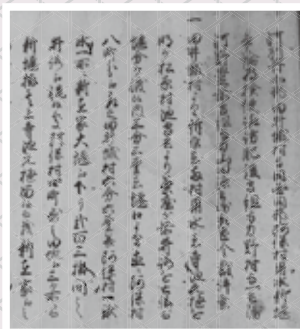
西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



【松原市全図】(昭和30年・1955年)松原市蔵。南から立部・西大塚・上田・阿保の部分。文字追記



【河内鑑名所記】(延宝7年・1679年)挿絵の稚児ヶ池(中央)池中に卒塔婆が建つ。上は阿保親王墓とされる河内大塚山古墳。下は阿保村の集落。



寺池における松原村による阿保村・田井城村への水論裁許状(享保7年・1722年)個人蔵。書き出し部分



近鉄線ごしに北側の寺池跡(上田2丁目)をのぞむ。左側は河内松原駅に至る。右側は池跡に面して、大塚高校第2運動場がある。

反正山(上田)・阿保・田井城 大正11年、大鉄(近鉄)線路敷設

左上の地図は、松原市が誕生した昭和三十年(一九五五)二月の「松原市全図」の一部です。現在のように市街地が膨張せず、江戸時代以降とあまり変わらない街村とその集落をとり囲むように田畑や数多くのため池が見られます。当時、地域の十分の一を占めるほど、ため池が多いことが特色でした。その中でも、南の立部から阿湯戸池・上ノ池・今池・小治ヶ池・樋野ヶ池・寺池・稚児ヶ池・海泉池が一列に並んで、北の阿保に向かつて群をなしていることがわかります。これは河内台地から平野に延びる谷筋に水を貯わえて灌漑池となつたものです。

しかし、今では上ノ池が大塚青少年運動広場などで潰廃し、今池の一部は府立大塚高校に利用されています。また、小治ヶ池は住宅地に生まれ変わり、稚児ヶ池もマンションなどが建設され、埋め立てられました。稚児ヶ池とは、古道の長尾街道(市道我堂一津屋線)をはさんで水をたたえていた寺池(上田二丁目)も昨年、商業施設が建てられ、同時に上田公園のオープンと共に住宅地としても開発されています。

ところで、寺池の形状を見ると、稚児ヶ池と一体ではないかと思えるほどです。寺池は四、〇〇haの池敷

面積を持ち、江戸時代以降、松原村(上田村)のうちの反正山村と阿保村・田井城村が水利権を持っていました。反正山村の樋野ヶ池の中樋から流出し、北接する上田墓地(歴史ウォーク283)を越えて寺池南堤の樋へ流れ込む水路が今も見られます。寺池に貯えられた水は、北方の阿保村や北西の田井城村の田畑を潤したのです。

江戸時代の史料を見ると、寺池では享保七年(一七二二)六月におこつた田畑へ送る水の配分を巡る阿保村と田井城村との争論で反正山村が含まれる松原村の池守が間をとり持った裁許状が残っています。

これに対して、稚児ヶ池は延宝七年(一六七九)に発刊された『河内鑑名所記』に、親王池の名で紹介され、児池とも表記されています。平安時代に阿保親王が池をつくり、同池に子孫の在原幸松磨が稚児の身で入水して、母親の病い回復を願ったという伝承があります(『歴史ウォーク』54)。同書に挿絵があり、同絵に、幸松磨を引う卒塔婆が池中に建っていることから、棒池ともよばれました。こうしたことから、ある時期、稚児ヶ池(棒池)も寺池も仏教的な要素を持つ池名として、形を見ても一つの池として認識されていたと思われます。

寺池が埋め立てられることを受けて、松原市教育委員会では、市道松原駅松ヶ丘線が長尾街道と突きあたる池跡延長線上の周辺を試験掘りしました。寺池の西側の長尾街道と中高野街道が交差する上田二丁目で、七世紀後半の長尾街道の前身古道と思われる遺構や遺物が検出されたり、街道北側の阿保四丁目では平安時代の掘立柱建物跡が確認されています。私は、江戸時代の宗教的施設の遺構や遺物が見つからないか期待していましたが、特筆される発見はありませんでした。

昭和三十年当時の地図を見て下さい。樋野ヶ池と寺池の間には、府道堺大和高田線はまだ開通していませんが、現在、平行して近鉄電車が走っています。地図上や現状からもわかるように、線路は、池の南側に敷設されていますが、もともとは寺池敷でした。近鉄は、大正十一年(一九二二)六月、当時は大阪鉄道(大鉄)とよび、道明寺駅―布忍駅間が開通しました。二年後の大正十三年九月のことですが、「大阪鉄道線路敷地用トシテ売却シタル寺池敷地代金分配」と表記された文書が残っています。すなわち、今の線路は、寺池敷地(坪数九畝式拾壹歩)であり、上田・阿保・田井城の旧三方村にそれぞれ売却代金が支払われて池の南側が埋められ、軌道として整地されたことが記されています。

松原に初めて走った鉄道ルートに寺池敷が利用されてから一〇〇年経った今、寺池には活気ある新しい街が誕生したのでした。